

後 記

佐藤明雄

ここに「九鬼周造文庫目録」を世におくることによって、甲南大学は実に30年ぶりにひとつの学界的宿題を果たすこととなる。

九鬼周造博士（1888～1941）についてはここにあらためて紹介するまでもなく、『偶然性の問題』、『人間と実存』、『西洋近世哲学史稿』等で知られるわが国で最も独創的な哲学者のひとりであった。その学殖は文字通り古今東西にわたり、綿密徹底した分析と情感豊かな芸術的心性とに恵まれた稀有の精神は、『いきの構造』や『文藝論』や歌集『巴里心景』のような書物に見事な結晶を示しているのである。

その九鬼博士の全蔵書と多数の遺品が、博士の生前には特に深いゆかりももたなかった甲南学園に寄贈され、現在、甲南大学の哲学研究室に所蔵されるに至った事情は次の通りである。すなわち、九鬼博士は京都帝国大学文学部教授に在任中の昭和16年5月、その独創に富んだ学風を未完のままに病に倒れ、54才の生涯を終えられた。遺された7,500冊の蔵書をはじめとして各種ノート、原稿、新聞の切り抜き等の遺品は、遺言によって博士の一高生以来の親友であり、かつ京大の同僚であった天野貞祐先生に託されたのである。

当時、天野先生は京大停年退官を前に、旧制甲南高等学校の創立者・平生釦三郎氏から同校校長への就任を強く懇請されていたが、「甲南に理想の学園を夢み、骨を甲南に埋める覚悟で」赴任を決意せられるに当って、九鬼文庫を甲南学園へ寄託されることをも決心されたのである。天野先生によれば、甲南学園は書物礼金として、九鬼博士の身の世話をみられた中西キクエ氏の生活費援助として金貳万円を（国債券にて）支出したとのことである。こうして昭和18年5月、九鬼文庫は甲南高校に搬入されてきた。当時、7年制甲南高校の尋常科2年生徒であった私自身もこの搬入作業を手伝ったのであるが、背表紙の美しい金文字や、黒色やこげ茶色に底光りした気品ある革装幀など、幼な心にも印象深く感じたことは今も記憶に新しいところである。しかし、当時の複雑なる学内事情の故に天野先生は在任僅か2年余、昭和21年には九鬼文庫を残して甲南を去り、一高校長に転ぜられた。

昭和26年4月、甲南大学が開設されるとともに九鬼文庫は大学に移管されたが、昭和31年、文庫は大学当局の方針によって再整理されて、一般図書に編入されるとともに、各学部・学科の研究室に分散分置されることになった。事実上の九鬼文庫の解体であり、消滅であった。九鬼文庫についての真の理解を欠いたこの措置が、文庫の荒廃を招いたのは当然である。私が専任講師として甲南大学に着任した昭和35年にも、この不幸な状態は続いていたが、私にとっては天野先生とのお約束どおり、九鬼文庫の復元を最大の念願としての甲南赴任であった。というのは、昭和32年の初夏、私は西ドイツの政府給費留学生として滞在していたハイデルベルクに天野先生をお迎えして、ネッカー河畔のホテルで長時間にわたりお話しを承ったことがあった。当時、私は甲南に就職しようとは夢想もしなかったが、九鬼文庫の現状を

伝えきいておられた天野先生が「将来、君が甲南に戻るようなことがあれば、どうぞ九鬼文庫のことをよろしく願います」といわれた言葉は私の心を離れなかった。そして、ゆくりなくも私が甲南からの招聘を受け、それに応える決心をしたのはその翌年の秋のことであった。それに加えて、私のハイデルベルクでの恩師・レーヴィット先生がマールブルク留学時代の九鬼博士とは親交の仲であり、九鬼文庫に深い関心を寄せられた一人であったことも、何かの因縁であったといえよう。レーヴィット先生が、ナチス治下のドイツを逃れて来日せられ、東北大学で教鞭をとるに至った経緯には、九鬼博士の温かい友情と尽力があったことを知る人は少ない。「蔵書目録が出来たら、是非1冊送ってほしい」といわれた先生であったが、その先生も今は亡い。

その後も九鬼文庫復元の作業は決して円滑には進まなかった。先ず分散分置されている文庫をしかるべき一ヶ所に回収する必要があったが、何よりもこれらの書物を収納するに十分な空間の確保さえが困難な事情であった。しかし、昭和39年、7階建の新学舎の完成を機にして現在の哲学研究室が設けられて、ここに九鬼文庫の一応の復元が可能となり、蔵書は各研究室から回収、統合されて再び一堂の書架に会することができたのである。文庫の散逸の危機はかろうじて回避せられたといつてよかろう。

次いで私の念願は「九鬼文庫蔵書目録」の発刊であった。蔵書目録を公刊して、広くその文献利用の便に資するのは、この様な学術的財宝を所有・管理するものの当然の義務と考えからである。しかし、甲南大学とその図書館の財政的ならびに人的能力には、残念ながら、かかる規模の蔵書目録を作製する余裕はなかった。せめてもの慰めは、研究室に出入りする学生諸君が私の啓発に刺激されて、蔵書の整理や、カードとの照合、整備に協力し、傷ついた革装幀に一冊、一冊と丹念にワセリンを与えて磨き、昔日の面影をとり戻してくれたことである。そういう状況のなかで、本学文学部学生・石垣哲二君が蔵書目録作製の全面協力を申し出てくれたのは3年前の春であった。当初私には、九鬼博士を敬慕し九鬼哲学に傾倒するこの若い学生が、いかに情熱に駆られての発意であろうと、学業を傍らにしてこの複雑多岐にわたる九鬼文庫の蔵書目録を完成させようものか、はなはだ懐疑的であった。しかし、以来3年間、カード照合から始まり原稿作製から索引、校正、造本の吟味、印刷所との交渉にいたるまで、殆ど独力の形でこの仕事を完成させてくれた石垣君の情熱と努力に対しては全く敬服と感謝の念を禁じえないのである。この蔵書目録はまさにかれの青春の記念碑といつて過言ではなからう。

ギリシャ、ラテン、サンスクリットを含み、英、独、仏等語等内容の多岐にわたる九鬼文庫の性質のため、一冊、一冊に細心綿密な検討が必要であり、単なる機械的労働力として他の協力を求めることは不可能であった。ただ文庫の原形を知るために、能う限りの過去の関係者に資料をもとめ、また、しばしば天野先生や澤瀉久敬先生を煩わせたが、特に作業中に寄せられた両先生の激励は私たちに大きな力であった。

九鬼文庫蔵書目録の作製にあたっては、凡例に記したように、あえて「日本十進法」(NDC)を採用せず、「九鬼番号」に従った。その選択には特に苦慮し二転三転したが、結局、文庫が九鬼邸にあった時点で九鬼博士自身によって整理分類されていたと推測される、いわゆる「九鬼番号」に従って排列し、各末尾に日本十進法による分類番号を付することにした。日本十進法を採用しないことについて、大学の図書館関係者からは図書館学の立場から、再三の注意をうけたが、文庫を単なる情報源と考えるのではなく、その整理分類の方法をも博士の学問像のひとつと考え、その保存さるべきと信じた私はあえて「九鬼番号」を採用したので

ある。この選択についての一切の責任は私に帰せられる。

第3部に記載した特別寄贈品は、この目録の作製中、昭和48年と49年の2回にわたり、天野先生から寄贈された品々である。(1) H・リッケルトのブロンズ胸像は、九鬼博士がハイデルベルク留学時代、リッケルトにカント哲学についての個人指導を受けた感謝の記念に、彫刻家であったリッケルトの子息に依頼して製作され、一体を教授の60才の誕生祝に贈り、一体を日本へ持ち帰られたものである。(2) 西田幾多郎先生の筆による、九鬼家の茶室に掲げられてあった「詠帰」の扁額。(3) 九鬼博士の一高、東大在学時代の講義筆記ノート百余冊。さらに昭和49年、満90才の誕生を迎えられた天野先生から「九鬼文庫へ友情のしるしとして」寄贈を頂いたのが、(4) カントの『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』の三部作の各初版と、(5) 「詠帰」の扁額の原筆と思われる西田幾多郎先生による「詠帰庵」の掛軸1本である。このうちで特に「第一批判」の初版は、昭和6年、天野先生による「第一批判」の翻訳完成を祝って九鬼博士が贈られたものであり、この度、天野先生はこれにご自身所有の貴重な「第二批判」、「第三批判」の初版二部を添えて寄贈下さり、亡き博士に対する今になお変らぬ友情を示されたわけである。思いみて誠に感慨一入なるものがある。

また、原稿が印刷にかかり校正も回を重ねた最終の時点で、文庫にさらに重要な寄贈が加えられることになった。七月末頃、校正刷の校閲を澤瀉先生にお願いしたことがその機縁であった。澤瀉先生には全般にわたって有益なご教示を頂き、特にフランス語については誤った表記法や誤字など全面的に修正の筆を入れて頂いたばかりか、八月の酷暑の一日には、懇々甲南の文庫を訪れ数時間にわたって現物図書との照合までして記載の正確を期して頂いた。他方、澤瀉先生より、九鬼博士の京大教授時代の講義ノートや原稿類が、ながく岩波書店に保管されてあった後、現在は先生のお手許に管理されていることが明らかにされた。そして今回の目録の公刊に当り、これらの資料の全部も九鬼文庫に合せ所蔵されることが望ましいとの先生のご判断によって、天野先生とのご相談の結果、26冊の講義ノートと未発表を含む百点余の原稿その他が甲南大学に寄贈、移管されることになったのである。この思いがけぬ貴重な寄贈によって、九鬼博士の学問的活動を知る全資料がここに蒐集されたことになり、文庫として一層の充実をみたわけである。

最後に、甲南学園が九鬼文庫を得て30余年、今ようやくその蔵書目録を完成して世におくる喜びを何よりもまず九鬼周造博士の霊にご報告したいと思う。それと同時に、甲南を去られた後も文庫の消息を終始こころにかけ、各種の寄贈をもって文庫の充実をはかれると共に、目録の公刊を忍耐強くお待ち下さった天野貞祐先生と、ご多忙の時間を割いて校正刷の全部に目を通して頂いたばかりか、本目録のために、九鬼哲学紹介の一文を快くお引き受け下さった澤瀉久敬先生には深甚の謝意を表したい。目録作製の作業開始の時点では、出版の可能性の目は皆無であった。せめてまず欧文篇の出版だけでも認めてもらえばと希ったのであるが、執拗な懇願と説得の結果、昨年末、大学当局は欧文両篇の出版費用を補正予算で承認することになった。この大学当局の理解ある措置に対しては、あらためてお礼を申しあげたい。上に述べた石垣君の文字通り献身的な努力、哲学研究室に出入りする学生諸君の協力、そしてわれわれの再三にわたる困難な要求や変更に対しても、終始誠意をもって応じて下さった日本印刷出版株式会社の小西三郎氏の配慮に対しても衷心よりの感謝を表したいと思う。

1975年秋